



(7) カキ  
イ 殺虫剤

農 薬 名	成 分 名	系 統 名	I R A C コード	適 用 病 害 虫 名												注 意 事 項		
				カ キ ノ ヘ タ ム シ ガ	ハ マ キ ム シ 類	カ イ ガ ラ ム シ 類	コ ナ カ イ ガ ラ ム シ 類	フ ジ コ ナ カ イ ガ ラ ム シ	イ ラ ガ	ヒ ロ ヘ リ ア オ イ ラ ガ	ミ ノ ガ	チ ヤ ミ ノ ガ	ア ザ ミ ウ マ	チ ヤ ノ キ イ ロ ア ザ ミ ウ マ	カ キ ク ダ ア ザ ミ ウ マ		ド ウ ガ ネ ブ イ ブ イ	カ メ ム シ 類
ア ク タ ラ 顆 粒 水 溶 剤	アマトキサム	ネオニコチノイド	4A	◎			◎							◎			◎	
ア グ ロ ス リ ン 水 和 剤	シメトリン	ピレスロイド	3A	◎										◎			◎	
ア デ ィ オ ン 水 和 剤	ヘルメトリン	ピレスロイド	3A	◎														
ア ル バ リ ン 顆 粒 水 溶 剤	シノテフラン	ネオニコチノイド	4A	◎			◎							◎			◎	
オ リ オ ン 水 和 剤 4 0	アネカルブ	カーバメート	1A	◎	◎	◎			◎					◎				
オ ル ト ラ ン 水 和 剤	アセフェート	有機リン	1B	◎				◎						◎	◎			
キ ラ ッ プ フ ロ ア ブ ル	エチプロール	フェニルピラゾール	2B											◎			◎	
コ ル ト 顆 粒 水 和 剤	ピリフルキナゾン	その他	9B			◎								◎				
サ ム コ ル フ ロ ア ブ ル 1 0	クロラントラニプロール	ジアミド	28	◎	◎					◎								
ス カ ウ ト フ ロ ア ブ ル	トラロメトリン	ピレスロイド	3A	◎										◎			◎	
ス ミ チ オ ン 水 和 剤 4 0	MEP	有機リン	1B	◎				◎	◎								成	◎
石 灰 硫 黄 合 剤	硫黄	無機殺菌	UN			落												落
ダ ン ト ツ 水 溶 剤	クロチアニジン	ネオニコチノイド	4A	◎			◎							◎			◎	
デ ィ ア ナ W D G	スピネトラム	スピリノシン	5	◎	◎									◎				
テ ッ パ ン 液 剤	シクラニプロール	ジアミド	28	◎	◎				◎					◎			◎	
ト レ ボ ン 水 和 剤	エトフェンプロックス	ピレスロイド	3A	◎	◎								◎	◎	◎		◎	
パ ダ ン S G 水 溶 剤	カルタップ	リトキシニル	14	◎					◎					◎				
ハ ー ベ ス ト オ イ ル	マシン油	天然物由来	UNM			◎												
フ ェ ニ ッ ク ス フ ロ ア ブ ル	フルハジジアミド	ジアミド	28	◎	◎				◎									
マ ブ リ ッ ク 水 和 剤 2 0	フルハリネート	ピレスロイド	3A	◎					◎		◎			◎			◎	
モ ス ピ ラ ン 顆 粒 水 溶 剤	アセタミプリド	ネオニコチノイド	4A	◎		◎								◎			◎	
ロ デ ィ ー 水 和 剤	フェンプロパトリン	ピレスロイド	3A	◎	◎									◎	◎		◎	
M R . ジ ョ ー カ ー 水 和 剤	シラフルオフェン	ピレスロイド	3A	◎										◎	◎		◎	

## ウ 病虫害防除法（カキ）

### （ア）炭疽病 *Glomerella cingulata*

#### （防除のねらい）

病原菌は主として罹病枝の組織内で越冬し、4月頃から雨水により伝搬する。

薬剤防除は4～10月に行う。新梢の発病が少なくても、収穫前の多雨や台風通過後は果実での発生が多くなる。

なお、「早秋」は本病に罹病しやすいので、防除回数を増やした方がよい。

#### （耕種的防除法）

- （1）罹病枝を除去する。
- （2）排水を良くするとともに適正な施肥を行い、2次伸長や夏秋枝の発生を少なくする。
- （3）密植を避け、通風、採光を図る。

### （イ）うどんこ病 *Phyllactinia kagicola*

#### （防除のねらい）

病原菌は、枝や幹、罹病して落葉した葉に形成した子のう殻で越冬する。

本病は乾燥条件により多発するので主たる防除時期は秋季であるが、本県での発病は少ない。

#### （耕種的防除法）

冬季に落葉の処分を行い、病原菌の越冬密度の低下を図る。

### （ウ）角斑落葉病・円星落葉病 *Cercospora kaki*, *Mycosphaerella nawae*

#### （防除のねらい）

病原菌は罹病し落葉した葉の組織内で越冬し、4～5月から風雨により伝搬する。

薬剤防除は、開花期～梅雨期に2～3回、例年多発する園では、8月下旬にさらに1回行う。

病原菌は気孔から感染するので、薬剤散布は葉裏を重点に行う。

#### （耕種的防除法）

- （1）落葉を処分し、病原菌の越冬密度の低下を図る。
- （2）樹勢の弱った樹に発病が多いので、肥培管理を適正に行う。

### （エ）灰色かび病 *Botrytis cinerea*

#### （防除のねらい）

5～6月頃強風などで若葉が傷んだ後に突発的に発生し、多発すると落葉や落果の原因となる。葉では葉縁および先端部付近から水気を失って灰緑色のちに淡褐色となり、波状を呈して落葉する。幼果では花落ち痕に黒色小点を生じるほか、落果する。多湿のときには、葉の病斑や花弁上に灰色のかびを生じる。

天候により発生の変動が大きく、発生が予測しにくい。

#### （耕種的防除法）

園内の通風を図り、多湿を避ける。

### （オ）カキノヘタムシガ（カキミガ）

#### （防除のねらい）

成虫は年2回、5月中旬～6月上旬と7月中旬～8月上旬に発生する。ふ化幼虫は芽を加害した後、果梗やヘタ部から果実内に食入する。繁殖は旺盛で防除を怠ると全滅に近い被害を受ける。

薬剤防除は第1、2世代とも成虫発生期から10日目に行う。この時期は芽への食入時期にあたり、薬剤の効果が高い。多発の場合には、成虫発生期の1週間後とその後10日目の2回行う。

#### （耕種的防除法）

- （1）8～9月にバンド誘殺を行い、冬季に取り外し処分して、密度の低下を図る。
- （2）越冬期に粗皮削りを行い、密度の低下を図る。
- （3）被害果は早期に処分する。

## (カ) ハマキムシ類

### (防除のねらい)

チャノコカクモンハマキとチャハマキの2種による被害が大きい。両種とも幼虫越冬し、チャノコカクモンハマキは年間4～5回、チャハマキは3～4回発生するが、いずれも発生期間が長い。

薬剤防除は、十分な効果が上がるように幼虫発生初期に重点を置く。第1世代は5月下旬～6月上旬、第2、3、4世代はそれぞれ7月上中旬、8月上中旬、9月下旬～10月上旬である。幼虫は葉と葉が重なった部分やヘタと果実の間に潜んでいるので、丁寧に散布する。

### (耕種的防除法)

- (1) 8～9月にバンド誘殺を行い、冬季に取り外し処分して、密度の低下を図る。
- (2) 越冬期に粗皮削りを行い、密度の低下を図る。

## (キ) フジコナカイガラムシ

### (防除のねらい)

本虫は、薬剤がかかりにくい粗皮・へたの隙間等に好んで寄生し、多発するとすす病を併発し防除が困難となる。第1世代幼虫は6月中～下旬、2世代幼虫は8月上～中旬に発生する。

防除は、休眠期に粗皮剥ぎを行うと共にマシン油等による防除及び、第1世代幼虫発生期の6月中～下旬に重点を置く。

### (耕種的防除法)

- (1) 8～9月にバンド誘殺を行い、冬季に取り外し処分して、密度の低下を図る。
- (2) 休眠期に粗皮削りを行い、密度の低下を図る。

## (ク) イラガ類

### (防除のねらい)

イラガとヒロヘリアオイラガの2種による被害が大きい。発生は種によってやや異なるが、多くは6月と8～9月中旬の年2回発生する。

薬剤に対してはわりと弱く、通常は他の害虫と同時防除される。

### (耕種的防除法)

- (1) 中齢幼虫まで集団で摂食するので、発生を見たら被害葉ごと摘除する。
- (2) 繭は枝幹の下部や間隙に着生するので捕殺する。なお、繭が肌に触れても強い痛みが生じるので注意する。

## (ケ) ミノガ類

### (防除のねらい)

オオミノガとチャミノガの2種による被害が大きい。被害は通常局地的であるが、卵数が多いので、時として大発生して多大の被害を与えることがある。

幼虫は主として6月下旬～8月上旬に発生する。幼虫はすぐに果実や葉を食害するが、若齢幼虫時は目立たないので、常に園内の発生に注意して発生初期に防除する。また、周辺の雑木、防風樹から移動分散することが多いので、これらの発生にも注意する。

## (コ) チャノキイロアザミウマ

### (防除のねらい)

果実の外観を著しく損なうので、発生初期の防除を徹底する。「刀根早生」、「平核無」では発生が多く、「富有」では少ない。

薬剤防除は開花10～15日後に行い、例年被害の多いほ場では、夏季の発生量が増加する直前から10～15日間隔で防除を行う。

### (耕種的防除法)

カキ園周辺のマサキ、サザンカ、ツバキなどは発生源となるので、できるだけ除去する。また、チャでも繁殖するので、茶園摘採後は園への飛来に注意する。

**(サ) カキクダアザミウマ**

**(防除のねらい)**

年1回の発生が主体であるが、一部は2回発生する。カキやスギ・ヒノキの樹皮間隙で成虫越冬したものが4月上旬～5月上旬に新芽に移って若葉に寄生し、巻葉をつくる。第1世代幼虫は5月下旬～6月上旬をピークに発生し、果実や葉を加害しながら順次越冬場所へ移動する。

防除は、越冬成虫のカキ園への飛来時期と果実の被害防止のために第1世代幼虫発生期に行うが、通常は他の害虫と同時防除されあまり被害は見られない。

**(耕種的防除法)**

越冬期の粗皮削り、巻葉の除去を行い、密度の低下を図る。

**(シ) コガネムシ類**

**(防除のねらい)**

ブドウのコガネムシ類の項参照。

**(ス) カメムシ類**

**(防除のねらい)**

常緑果樹・落葉果樹共通(4)カメムシ類の項参照。